

巻頭写真 三内丸山遺跡の柱材

Pillar timbers used at the Sannai-maruyama site

三内丸山遺跡では巨木による6本柱建物(第26号掘立柱建物)、大型住居、高床式建物などが復元されているが、これらの構造材の主要部分は全てクリ材が使用されている。特に6本柱建物には直径1 m、長さ15 mを超える材が求められ、国内での調達から難しいことからロシアからの輸入材が使われたことはよく知られている。このようにクリ材を使って復元することになったのは、出土木柱の樹種同定の結果を反映したためであるが、三内丸山遺跡では長年にわたる調査の過程で資料が膨大に蓄積され、それらの整理や分析等が新たな発掘調査と並行してなされていることから、速報的に情報は伝わってきても、正式な調査結果の発表というのはどうしても遅れがちになっている。そんな中で、報告書の刊行が年次計画にしたがって着実に進んでいるのを横目で視つとも、今回、植生史研究特集号が三内丸山遺跡における植生・植物資源研究の成果を中心として取りまとめられたものであることを受けて、ここで、実際、どの遺構からどの木柱が出て、それについては何が調べられているのかを整理してみた。いずれは正式な報告書で更に詳しい情報が提供される予定であるが、個々の報告書では扱っている発掘調査区のことしか記述されないのが普通であるので、これらの情報を横に繋ぐものとしてこの巻頭のページを活用させてもらう。

自然木を含めて、これまで1111点の木材の樹種が調べられているが、そのうち、遺構に伴う柱材と認定されているのはわずか12点であり、これらは全て、樹種同定の結果クリと分かっている。12点の内訳は、1) 旧野球場建設予定地内の第26号掘立柱建物の柱材6本、2) 旧野球場建設予定地内の第59号掘立柱建物の柱材2本、3) 第19、27、29次調査区の柱材4本である(図1)。

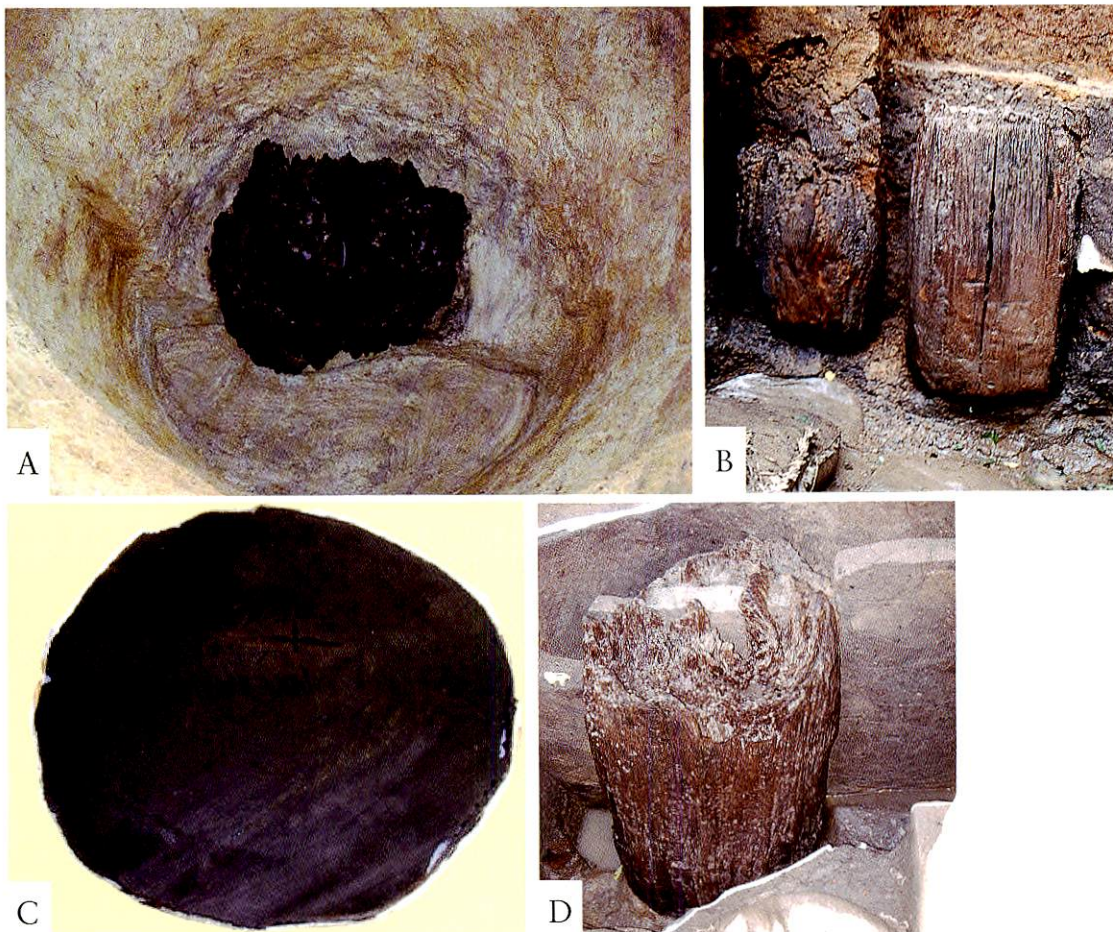


図1 三内丸山遺跡出土の柱材。A:第26号掘立柱建物のP4(AOM-8)の木柱、B:第19次調査区のP11496(左)とP11497(右)、C:P11496(AOM-231)の輪切り、D:第29次A調査区のP13729の木柱(AOM-13729)。直径は50cm。

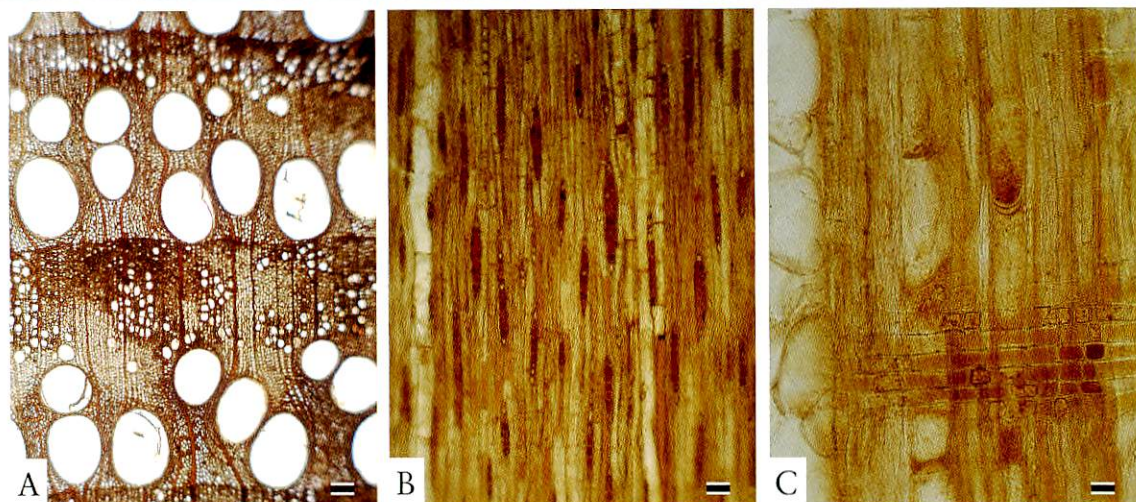


図2 旧野球場建設予定地内第59号掘立柱建物のクリ柱材 (P6171; AOM-5) の顕微鏡写真。A:横断面 (scale = 200 μ m), B:接線断面 (scale = 100 μ m), C:放射断面 (scale = 50 μ m)。

1) 旧野球場建設予定地内の第26号掘立柱建物が既に述べたように復元された「6本柱建物」で、木柱がすべて残っており、樹種が調べられている。図1AにはそのうちのP4の柱を示した。これら6本の柱の調査報告書は平成18年度に刊行予定なので、樹種同定の詳細はそちらに譲ることとする。なお、現在PEGによる保存処理中で、年輪解析などは行われていない。

2) 旧野球場建設予定地内には多くの掘立柱建物跡が検出され、その幾つかが復元されているが、木柱が残存していたのは第59号掘立柱建物のP6171 (AOM-5) とP6168 (AOM-4) のわずか2点である。この地区の発掘調査報告書 (青森県教育委員会, 2006, 三内丸山遺跡30 (青森県埋蔵文化財調査報告書第423集)) には樹種同定結果が掲載されなかったため、ここに正式に報告する。図2に見るように明瞭な環孔材で年輪の始めの大道管, 晩材部の火炎状配列の小道管, 単列放射組織, 単一穿孔などから、紛れもなくクリ材である。残存していた部分が小さいので年輪解析はなされていない。また、AMSによる放射性炭素年代測定でP6168が 4180 ± 60 yr BP, P6171が 4190 ± 50 yr BPの値が出ている (辻・中村, 2001)。

3) 第19, 27, 29次調査区は三内丸山遺跡展示室の北側の沖館川にむかう斜面の部分で、第29次調査A区および第19, 27次調査区は斜面部分の同じ場所で、第29次調査B区は斜面上の平坦な場所である。これらの調査区に木柱があることは既に平成9年度の第9次調査で判明しており、平成12年度の第19次調査の際に、P11496 (AOM-231) とP11497 (未同定) の2本が取り上げられた。これらは輪切りにされ、年輪解析が福島大学の木村勝彦氏により、またP11496のAMSによるウイグルマッチング法を適用した放射性炭素年代測定が国立歴史民俗博物館によりなされている。樹種同定結果の詳細とともに平成19年度の報告書に記載されると聞いている。一方、同じ地区のP13729から新たに木柱 (AOM-5850) が検出され、第29次B区のP11301から出土したわずかに木質部が残存した木柱 (AOM-5849) とともに双方ともクリであることが既に報告されている (青森県教育委員会, 2006, 三内丸山遺跡29 (青森県埋蔵文化財調査報告書第422集), 190-191)。このAOM-5850は同調査区の他の3本とともに本年度に取り上げられ、年輪解析およびウイグル・マッチング法による放射性炭素年代測定が行われる予定とのことで、すでに解析がなされている2本と合わせて遺構のプラン, 編年, そして成長解析によるクリ木材資源利用について大きな知見が得られると期待される。(本稿を草するに当たり青森県教育委員会三内丸山遺跡対策室より写真及びデータの提供を頂いた)

引用文献

辻 誠一郎・中村俊夫, 2001. 縄文時代の高精度編年: 三内丸山遺跡の年代測定. 第四紀研究 40: 471-484.

(鈴木三男 Mitsuo Suzuki)